

モードは語る

中野 香織

歴代のファッションデザイナーのなかには、創作のプレッシャーに押しつぶされた天才もいる。しかしアイデアを生み続け、年齢を重ねてさらなる挑戦を楽しみ、長寿を謳歌している人も多い。97歳にしてチャミングに語るピエール・カルダンは後者の代表である。そんなカルダンの初のドキュメンタリー映画「ライフ・イズ・カラフル！」が公開される。70年間にわたるデザイナーとしての功績そのものが、カラフルな「初めて」尽くしで心が躍る。

たとえばオートクチュール全盛の1960年代に大衆向けプレタポルテを

ピエール・カルダン

カラフルに先駆けた功績



「ライフ・イズ・カラフル！」の一場面
＝アルバトロス・フィルム配給

発売する。世界初のメンズコレクションを開拓する。ビートルズの襟なしスーツがまさにカルダン。多文化主義の先駆けで日本人や黒人をモデ

ルに起用する。ポップで神秘的な松本弘子をミューズに抜てきした慧眼（けいがん）たるや。ライセンス契約を導入し800点ものカルダン・ブランド商品を世に送る。そして社会主義国の中国やソ連で初のショー。

背景にはカルダンの人柄と行動力、強運があることが、これまたカラフルに描かれる。さらに、執念深い、もとい、強い意志の持ち主であることも示唆される。新作を着たカルダンをドレスコード違反として門前払いしたマキシム・ド・パリの仕打ちを忘れず、後に経営権を獲得してオーナーになる痛快さときたら。

上階を長年かけて収集した名品を展示する美術館にし、理想のマキシムに作り替える展開は、リベンジドラマの王道にも見える。

女優ジャンヌ・モローとの恋が男性の恋人と別れられず結実しなかったエピソードをはじめとし、同時代の著名人たちとのカラフルな交友関係も興味深い。

カルダンには境界がない。国境、人種、性別、色彩の固定観念、ライフスタイルと服、公私、レストランと美術館（！）などあらゆる境界を超え、リスクをとって時代を先駆け、遠くを見ながら未来を作り続ける。創作のプロセスそのものを楽しむことがモードの醍醐味であり、人生を味わい尽くす秘訣であることを、彼は教えてくれる。（服飾史家）